

土木屋の読書と旅(6)

平成 30 年 7 月

来年には元号が変わる。「昭和は遠くなりけり」である。

昭和 30 年代後半、私はまだ小学生であったが、当時日本のテレビ番組のゴールデンタイムでは米国のドラマが席卷していた。パックス・アメリカーナの到来である。

記憶に残るドラマのひとつに『ルート 66』がある。主演俳優もストーリーも全く思い出せないが、タイトルの響きとシボレー・コルベット（主演の若者たちが乗り回すスポーツカー）に代表されるアメリカン・カルチャーのカッコよさに惚れた。



ルート 66、日本風にいえば国道 66 号であるが、イリノイ州シカゴからカリフォルニア州サンタモニカを結び、延長 3755 km の大陸横断道路 highway（高速道路の意味ではなく、幹線道路を指す）である。また、国道の表示マークも紋章のようだった。



こいい。ちなみに日本の国道のマークは逆おむすび型で、国道番号は 58 号から 101 号へ飛び、国道 66 号はない（べつに張り合う必要はないが）。



最近になって分かったことだが、なぜ『ルート 66』の主演者もストーリーも全く思い出せないのかの理由である。当時の放送が午後 9 時 45 分からであったこと（9 時を過ぎると当時の小学生はたいてい眠りについていた）と、同日午後 8 時から他局で超人気番組の『ララミー牧場』があり関心がこちらに向いていたことである。『ララミー牧場』のロバート・フラーや番組最後が解説者淀川長治の「はい、もう時間が来ました。サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」で締めくくられ、バヤリスオレンジジュースのコマーシャルが流れたことなどは鮮明に覚えている。

* * *

昭和 50 年代初め、学部土木系学生のために第 1 線で活躍している先輩による特別講義というものがあつた。2、3 人の方が来校されたと思うが、今でも覚えているのは武部健一さん（平成 27 年逝去）である。当時は道路公団東京建設局長であり、公団退職後は株式会社平エンジニアリング社長、道路文化研究所理事長などを歴任された。ドイツのアウトバーンを手掛け、日本にその計画手法を伝えたクサヘル・ドルシュに直接学んだ人であり、欧米の設計思想と名神・東名での経験・知見を踏まえ、高速道路の計画・幾何構造に関する技術基準の集大成に貢献された人である（当時は公団の局長という認識しかなかった）。

講義に現れた武部さんは小柄で上品な紳士であつた。語り口は穏やかであつたが、高速道路に対する熱い思いにあふれ、道路に関する幅広い文化論も興味深かつた。たとえば、“古代道路に似る高速道路”という話である。武部さんの最近の著作から一部を引用するところなる。

『日本の全国的な幹線道路には、①古代道路、②江戸期街道、③近現代国道、④高速道路の四段階がある。②と③はほとんど同じなので、実質的には三段階ともいえる。同じような場所を通る路線で、江戸期街道だけが別ルートで、古代路と現代の高速道路が同じ場所を通ることがしばしばある。なぜそうなるのか。それは両者に共通した性格があるからである。そのキーワードは計画性と直達性である。…古代路も高速道路も、遠く



土木屋の読書と旅(6)

平成 30 年 7 月

の目的地に狙いを定めて、計画的に進んでいく。これを計画性と直達性という。』

* 『道路の日本史』 武部健一：中公新書 より引用

* 武部さんにはその他の著作として、『道のはなし I II』『完全踏査 古代の道』などがある。

特別講義は高速道路の線形設計についてであり、特にインターチェンジの設計について熱心に教えていただいた。参考文献は氏の博士論文の一部。単位取得のため出された課題は、与えられた地形図上に鉛筆書きのフリーハンドでいいから地形・土地利用を読み取りインターチェンジ案を数案作成し、その理由を述べよというものであった。講義最終日には道路公団のバスを利用して名神高速道路栗東インターチェンジを見学に行った。日本の高速道路の開通は、昭和 38 年名神高速道路栗東 I C～尼崎 I C間が最初である。昭和の終わりころ、道路に関する欧米から導入された技術・設計概念は咀嚼され、わが国独自の研究・技術集積も進み、その成果を広めるため交通工学会から交通工学実務双書全 10 巻（技術書院）が刊行された。その第 5 巻『道路の計画と設計』は武部健一氏の編著によるものである。

* * *

平成 5 年から 8 年間、私は道路の企画、設計及び建設に携わった。上記の武部氏の本も含めて「交通工学」「道路工学」に関する教科書を多読する中で刮目に値する本と出会った。『HIGHWAY CAPACITY MANUAL』（邦訳『道路の交通容量 1985』交通工学会；コロナ社；昭和 62 年発行）である。交通容量解析手順やこの解析に基づく道路の計画及び設計手法が例題と図表によりわかりやすく説明されている大部の本である。米国流のマニュアル本の凄さを実感させられた。

* * *

昭和 55 年 9 月、5 日間ニューヨークに滞在した。当時流行の往復航空券と宿泊ホテルのみの格安パック旅行である。……PANAM ビルを背景にした宿泊先の古ぼけたホテル / 同室となった青森出身で小説家志望の青年に同行を懇願され落書きだらけの地下鉄に乗ってコロムビア大学のドナルド・キーン教授を訪ねよう試みたこと（当然アポなしで会えるほど世の中甘くない） / macy's (the world's largest store



と看板に書いてあった)で豊富な品ぞろえとバラティティ豊かな色合いに圧倒されたこと / ラリッているのかと思うほど陽気なドライバーのイエローキャブに乗ってブロードウェイに行ったこと（『コーラス・ライン』はチケットが取れず） / 五番街のティファニーは高級宝飾店であり気軽に朝食が取れるような場所ではなかったこと / ウォール街の西にのっぽのツイン

タワービル（ワールドトレードセンター）が見えたこと / 繁華街を外れた通りでは舗装に穴ぼこがたくさんあり、場所によっては鉄板で応急措置がしてあったこと（荒廃するアメリカを実感、その後見事に立ち直っている） / 帰路便でエンジントラブルのためアラスカに緊急着陸し、深夜着いた東京で聴いた『ダンシング・オールナイト』が演歌に聞こえたこと……昔日の思い出である。翌年、27 歳の私は土木事務所から道路建設課へ異動した。



* * *

「昭和」とは、私にとってポップな教養小説（ビルドゥングスロマン）のような時代であった。

古谷 健